様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２６０２
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１９６４０

研究課題名（和文）乳幼児精神保健に基づく地域子育て支援　ペアレント・メンターの養成と協働支援の構築

研究課題名（英文）Creating a parenting community of children with developmental disorders based on IMH: Parent mentor program and building collaborative support

研究代表者
幸本　敬子（KOMOTO, KEIKO）

東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・非常勤講師

研究者番号：８０７７８９６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、乳幼児のメンタルヘルスに基づいた地域子育て支援として、発達障害児の母親を対象としたペアレントメンターの養成を実施した。ペアレントメンターと専門家が協力してペアレントトレーニングを実施し、その有効性を評価した。
メンター養成プログラムは、メンターの自己効力感の維持・向上と子育てレジリエンスの向上の可能性につながった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ペアレント・メンターの養成および専門職との協働支援構築は、地域における子育て力を促進することを目的としている。
ペアレント・メンターと専門職との協働支援体制の構築は、親たちだけでの自助グループでは補えない育児不安や認識の過ち等を回避し、安全で安定した地域に根付く障害児支援の体制を可能とする。更には、地域における家族支援および母子保健水準の向上に寄与するものと考える。

研究成果の概要（英文）：This study trained parent mentors for mothers of children with developmental disabilities as community parenting support based on infant mental health.Parent mentors and specialists worked together to implement parent training and evalieted the effectiveness.
The mentor training program led to the maintenance and improvement of mentors' self-efficacy and the possibility of improving parenting resilience.

研究分野：小児看護学（乳幼児精神保健）

キーワード：乳幼児精神保健　地域子育て支援　ペアレント・トレーニング　ペアレント・メンター　発達障害児

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

子どもの発達障害が広く認知されるようになり、早期介入の必要が強調されている。しかし、子どもの発達障害に対する理解および支援は充分とは言えず、乳幼児期から顕在する子どもの気難しさやこだわりといった特性由来の育てにくさは、親子の衝突を生みやすく、虐待に発展することも少なくない。

2013 年に障害者自立支援法から障害者総合支援法と法が改正され、厚生労働省は、児童福祉法、身体障害者福祉法、知的障害者福祉法との関連も含めた方針として「発達障害者の地域支援体制の確立」を挙げている。とくに支援体制の整備として、発達障害者やその家族に対して一貫した支援を行うため、支援関係機関のネットワークを構築するとともに、ペアレント・メンター（発達障害者の子どもを持つ親であって、その経験を活かし、子どもが発達障害の診断を受けて間もない親などに対して助言を行う者）の養成とその活動を調整する人の配置、アセスメントツールの導入を促進する研修会の実施、家族対応力の向上を支援するペアレント・トレーニングや当事者の適応力向上を支援するソーシャル・スキル・トレーニングの普及の推進を方針として明らかにしている。この方針を受けて、わが国では複数の地域でペアレント・メンター養成が実施された。しかしながら、いずれも自助グループ活動の延長で電話相談やグループ相談を行う形態が主であり、ペアレント・メンターの物理的・心理的負担の増大とペアレント・メンターによる親支援の仕組みづくり、専門家によるバックアップの必要性が課題として挙げられている。また、厚生労働省はペアレント・メンターの養成に加えて、支援を必要とする親とペアレント・メンターを適切に結びつけるペアレント・メンター・コーディネーターの配置を推奨しているが、具体的な役割・内容等は明らかとなっておらず、メンター活動が定着するための課題は多い。また、ペアレント・メンターによる親支援の有用性およびエビデンスとなる実証的データは些少であり、その検証は急務である。

２．研究の目的

発達障害のある子どもをもつ親への育児支援として、ペアレント・メンターの養成を行い、ペアレント・メンターと専門職が組織的に協働する体制を試験的に実践し、その実行可能性および効果を量的および質的なデータから検討することを目的とする。

３．研究の方法

１）対象

メンターの選定は、小児科クリニックにおいて先行実装している乳幼児精神保健に基づくペアトレの修了者で、発達障害児の育児経験があり、且つメンターを希望する母親 2 名を対象とした。メンター活動の場となるペアトレは、受講を希望する発達障害児の複数の母親で構成され、メンターが参加することを説明し、了解を得た。

メンター養成・活動に関わる専門職は、乳幼児精神保健を学んだ看護職 2 名と心理師（士）、言語聴覚士から成る。2 名の看護職のうち 1 名の看護師は、メンターとともに全ての養成プログラムに参加した。

２）期間とメンター養成プログラム（図１）

(1)養成プログラム①(講義・演習編)

講義・演習をメインとするメンター養成プログラム①は 2019 年 9 月～2020 年 8 月までに、1 回の講義（演習）は 120 分で、計 12 回行われた。ファシリテーターは乳幼児精神保健を学んだ 看護職が担当した。講義で知識を獲得するだけでなく、ロールプレイやディスカッション、実際の子育てや母親コミュニティに対するフィードバックなどを実施し、メンターとしてのスキルアップも行った。

(2)養成プログラム②（実践編）

養成プログラム②は、メンターとして専門職とともにペアトレに参加し、ペアトレを受講する母親たちと実際に交流し、傾聴や助言等を実践することをメインとする。2020 年 10 月～2022 年 9 月まで行われ、この間に開催されたペアトレは 3 グループ（メンター参加群）であった。ペアトレ参加後はメンター活動の振り返りとして、協働した専門職とショートカンファレンスを実施するとともに、ペアトレ開催日とは別にミーティングも行った。

３）調査内容

(1)メンターとしての自己効力感

養成プログラム①（講義・演習編）では受講前と受講後に実施し、養成プログラム②（実践編）では、メンターとして参加したペアトレの各グループ最終回の後に行った。調査には Self-Efficacy Questionnaire for facilitators（SEQ）を用いた。

(2)養成プログラムの評価

養成プログラムの評価には Training Acceptability Rating Scale (TARS)を用いた。評価時期は、養成プログラム①②の終了後である。

(3)ペアトレを受講した母親の養育行動

母親の養育行動の傾向はPositive and Negative Parenting Scale（PNPS)を用いて評価した。メンターが参加したペアトレを受講した母親（メンター参加群）と、メンターが参加する以前のペアトレを受講した母親（非メンター参加群）との比較検討を行った。

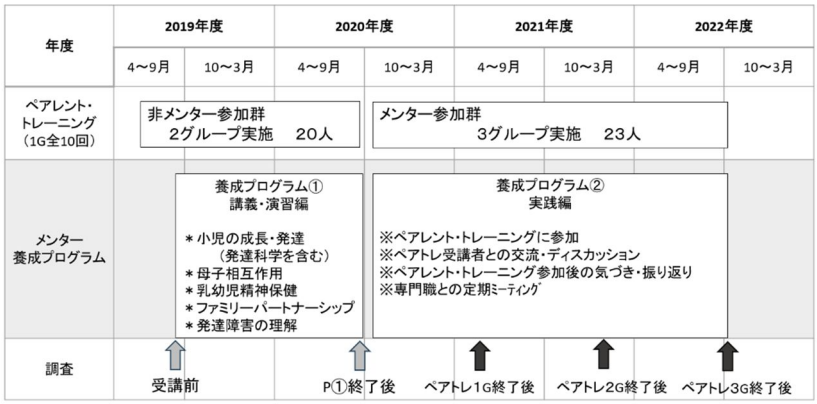

図1. ペアレントメンター養成プログラムおよびメンター活動

４．研究成果

1)属性

メンター2名の属性を表１に示す。全12回の養成プログラム①（講義・演習編）は、2名ともに全て参加し（完遂率100%)、養成プログラム②（実践編）は子どもの体調不良による欠席があったが、3グループ（1グループ：全10回）のペアトレ参加率は１人平均93%で、2人のメンターがどちらも欠席するペアトレはなかった。

表１：対象者の属性（*N*=２）

対象者	年齢	子ども	就業状況	最終学歴	配偶者
A	40代	１人（10歳女児）	パート勤務	4年制大卒	有　40代常勤
B	30代	１人（5歳男児）	パート勤務	4年制大卒	有　40代常勤

2）メンターとしての自己効力感

メンターとしての自己効力感について受講前、養成プログラム①（講義・演習編）終了時、養成プログラム②（実践編）のメンター活動終了時（ペアトレ３グループの各最終回後）の評価点の推移を図2に示す。受講前から養成プログラム①（講義・演習編）終了時には上昇が認められた自己効力感は、実際にメンターとしてペアトレに参加した後に低下する傾向が認められ、その後に緩やかに上昇する傾向がみられた。

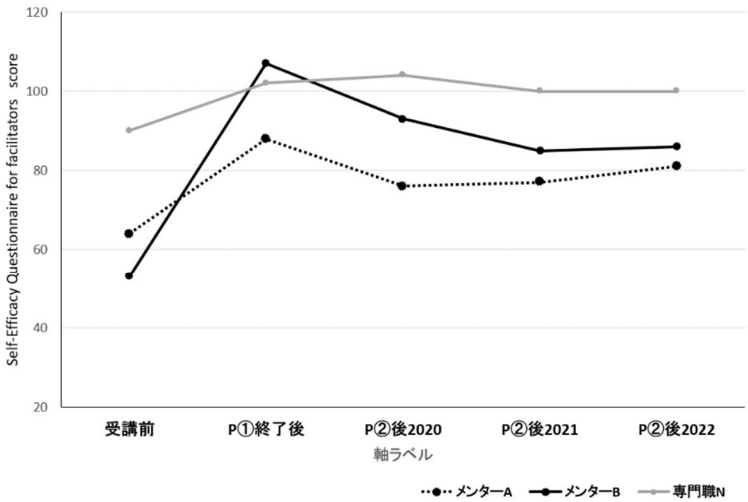

図2.メンターと看護師の自己効力感（*N*=3）

メンター別に下位項目別の推移を図３に示す。2人のメンターに共通して実践活動後に点数が下がった項目は「グループの進行役として自己開示を適切に使用する」、「親への具体的で建設的な助言を与える」の２項目であった。一方で、点数が増加した項目は「子どもの背後にあるニーズに対する親の理解を助ける」、「親のネガティブな感情のコントロールを助ける」、「育児から解放されたいと思う親の訴えを傾聴する」、「子どもの権利を擁護する姿勢をもち親に伝える」の4項目であった。また、メンターと協働した看護師の自己効力感は、養成プログラム①②を通して大きな変化は見られなかった。

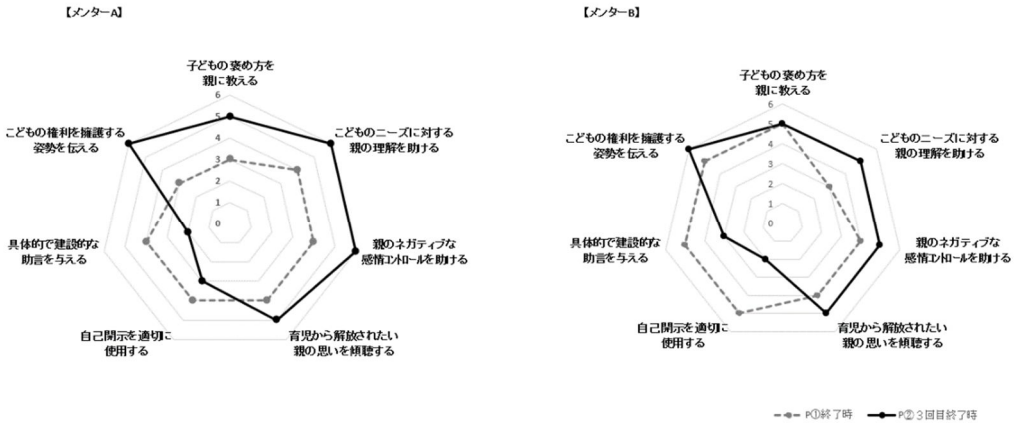

図3. メンター活動(ペアトレ) 前後の自己効力感

（3）養成プログラムの評価

評価に用いたTraining Acceptability Rating Scale (TARS)の２つの構成下位尺度である「子育ての知識、スキル、自信等の獲得（4 項目）」と「プログラムの満足度と内容（5 項目）」は、実際にペアトレに参加し、メンター活動を行った後の評価点がいずれも低下した。図４に養成プログラム①（講義・演習編）終了後と養成プログラム②（実践編）終了後に測定したプログラムに対する評価得点をメンター別に示す。とくに下位項目の「このプログラムは効果的な子育てをする親としてのあなたの自信を高めましたか」、「このプログラムは、取り上げることになっているトピックをすべて網羅していましたか」、ファシリテーターはあなたをやる気にさせてくれましたか」の項目は、２人のメンターに共通した低下項目であった。また、自由記載欄には、「やりがいがあった」「役に立ててうれしかった」「自分自身の現在の育児を振り返る機会になった」と肯定的な意見がある一方で、「ペアトレの中でメンターとしての不安を抱えると次回の参加も不安になってしまう」、「メンターの発言をその場で補足してくれる専門家のコメントが欲しかった」、「事前の講義やペアトレとの日程調整などのメンターになるための準備が大変」「メンターの数が少ないと負担が大きい」といった運営上の課題に関する記載もあった。

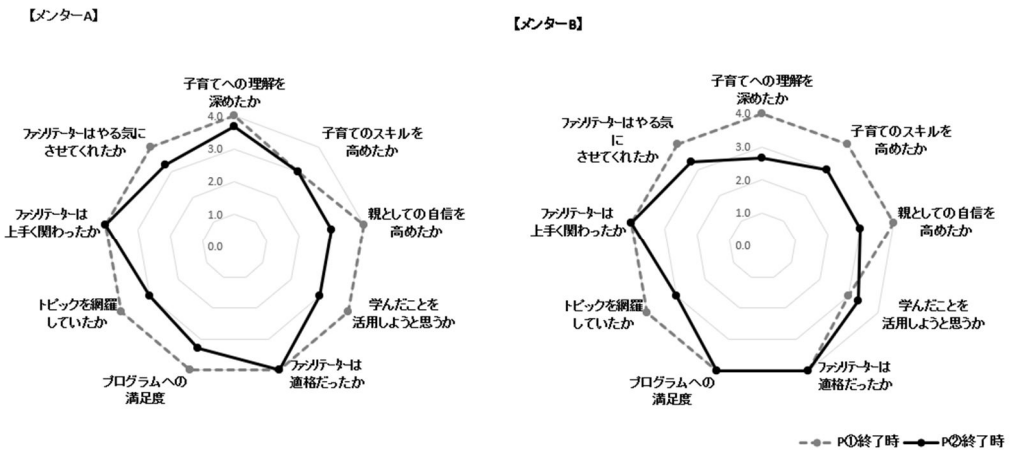

図4. メンターのプログラム評価

(4) ペアトレを受講した母親の養育行動

母親の養育行動において、メンター参加群と非メンター参加群の比較をしたところ有意な差はいずれの項目にも見られなかった.

ペアトレ終了後に行った自由記載のアンケートでは、メンターに対して「メンターさんの話を聞いて、我が子への理解が深まった」、「実際の工夫が聞けて参考になった」「ペアトレをどのように活用したのか、またその後の話が聞けてよかった」などの同じ発達障害児を育てる母親の育児実践に対する言及が多くみられた。

５．考察

（１）ペアレント・メンターの養成

養成プログラム受講前の自己効力感は、プログラム①を終えた時点で高くなった。これは、新たな知識を得たことや自身が受けたペアトレに対する根拠を知ることで深い理解に繋がったこと、これからペアトレで実践していくことへの期待の影響を受けている。また、養成プログラム②以降において、「子どもの行動の背後にあるニーズに対する親の理解を助ける」、「親のネガティブな感情のコントロールを助ける」、「育児から解放されたいと思う親の訴えを傾聴す

る」の３項目に関する自己効力感が増したことは、実際のメンター活動を通して、同じ発達障害児を育てる母親同士のかかわりのなかで共感や傾聴、振り返りができたことによるものと考察する。これは、メンターが行う支援においては、援助する側であるメンター自身も何らかの援助者利得を得ているとの報告にも一致する。また、専門職からのコメントやアドバイスもメンターの自己効力感向上に影響していることが明らかとなった。一方で、メンター活動後の評価において自己効力感が低下した「グループの進行役として自己開示を適切に使用する」、「親への具体的で建設的な助言を与える」の２項目は、ペアトレを受講している母親もメンターも同じ地域で子育てをしている母親同士であることの影響が大きいと推察する。井上らは、メンター活動の中でメンターが自己体験を語るさまざまな機会がある点に注目し、その中に肯定的体験や否定的体験になりやすいカテゴリ項目が存在することを明らかにしている。特に否定的な側面について、つらかった経験を消化できていないうちに語ることで、傷つき体験となることを指摘しており、本研究結果もこれを支持するものであったといえる。専門家からのフォーマルな支援とは異なる当事者同士だからこそできる共感や傾聴は、親同士の支えあいとして支援する側・支援される側双方に孤立感の低減や自己肯定感の促進、自信の回復をもたらす一方で、否定的な経験になる要素も含んでいることを協働する専門職は認識する必要がある。

（２）乳幼児精神保健に基づくメンター活動

今回のメンター養成は、一貫して乳幼児精神保健の理念に基づいたシステムとなっている。「子どもの健全な発達のために親子の良好な関係性が不可欠である」という理念が、メンター、ペアトレを受講する母親、専門職の間で共通理念となり、関わる者すべてにとっての羅針盤のような機能を果たすといっても過言ではない。親子の関係性を良好に保つことは容易なことではなく、子どもが発達障害児であれば尚更である。発達障害児を育てる親にとって、子どもの特性を正しく理解し、適切に対応することは難しく、親や友人に尋ねても満足のいく回答が得られず、子どもとの関係性を良好に保つことは困難を極める。メンターを通して子育てモデルに出会うことは、我が子の特徴をより正しく理解できるようになり、育児に見通しを立てやすくさせるとともに、子どもとの良好な関係性構築に向けた具体的かつ実践的な方法を学ぶ機会となる。鈴木らは、養育困難があっても良好に適応する母親の養育レジリエンスとして、①親意識、②自己効力感、③特徴理解、④社会的支援、⑤見通しの５つを抽出し、親が育児に前向きになる必要要素としている。一貫した乳幼児精神保健の理念に基づく本研究のメンター養成プログラムとペアトレによる親支援は、養育レジリエンスの要素に合致している。親子の関係性支援の理念が、メンターと専門職およびペアトレを受講する母親たちとの関係性に与える影響も大きく、次世代のメンター輩出への貢献度も高いと推察する。そのためにも一貫した理念は不可欠であり、乳幼児精神保健に携わる専門職との協働支援は外せない要素といえよう。

≪引用・参考文献≫

1. 厚生労働省：発達障害者支援施策の概要「発達障害児および家族等支援事業」https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/hattatsu/gaiyo.html（参照 2023/9/1).
2. JG Ainbinder, LW Blanchard, GH Singer, et al. (1998). A qualitative study of parent to parent support for parents of children with special needs. Consortium to evaluate Parent to Parent. Pediatric Psychology. 23 (2): 99-109.
3. 原口英之，小倉正義，加藤　香，他.（2020）．自治体におけるペアレントメンターの活動に関する全国調査．発達障害研究．42(3)：271-278.
4. 原口英之，小倉正義，山口穂菜美，他.（2020）．都道府県・政令指定都市におけるペアレントメンターの養成および活動に関する実態調査．自閉症スペクトラム研究．17(2)：51-58.
5. Komoto Keiko, Hirose Taiko, Omori Takahide., et al. (2015) Effect of Early Intervention to Promote Mother: Infant Interaction and Maternal Sensitivity in Japan: A Parenting Support Program based on Infant Mental Health. Journal of Medical and Dental Sciences. 62(4):77-89.
6. 幸本敬子，大川洋二.（2016）．乳幼児精神保健に基づく親子関係促進のためのペアレント・トレーニングの効果検証．大同生命地域保健福祉研究助成 研究報告書．公益財団法人 大同生命厚生事業団.
7. 綾木香名子，原口英之，小倉正義，他.（2014）．ペアレント・メンターに関する調査．厚生労働省平成 25 年度障害者総合福祉推進事業報告書「家族支援体制整備事業の検-証と家族支援の今後の方向性について．17-23.
8. 井上雅彦，奥田泰代.（2020）．ペアレント・メンターにおける自己体験の語りの意味．自閉症スペクトラム研究．18(1)：15-20.
9. 鈴木浩太，小林朋佳，森山花鈴，他.（2015）．自閉症スペクトラム児（者）をもつ母親の養育レジリエンスの構成要素に関する質的研究．脳と発達．47(4)：283-288.
10. Singer, G.H., Marquis, J., Powers, L.K., Blanchard., et al. (1999). A multi-site evaluation of parent to parent programs for parents of children with disabilities. Journal of Early Intervention, 22(3): 217-229.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Keiko Komoto, Kayoko Szuki, Hiroji Okawa
２．発表標題 Parent Training for Promoting Parent-Child Relationships Based on Infant Mental Health
３．学会等名 WAIMH(The World Association for Infant Mental Health)17th World Congress（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 鈴木嘉代子、幸本敬子、大川洋二
２．発表標題 乳幼児精神保健の視点を取り入れたペアレント・トレーニング ～母親の養育行動からの考察～
３．学会等名 乳幼児保健学会第 14 回学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Keiko Komoto,Kayoko Suzuki,Akito Sasaki,Hiroji Okwa,Motoko Okamitsu,Satoshi Yago
２．発表標題 Creating a parenting community of mothers to nurture children with developmental disorders based on IMH
３．学会等名 18th World congress for the Association for Infant Mental Health 2023（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関